

その他

小児糖尿病患者が写真を持ちいて表現した対処行動

中村 伸枝 (千葉大学看護学部)
兼 松 百合子 (千葉大学看護学部)

Exploring the coping behaviors of diabetic adolescents using photographs

Nobue Nakamura, Yuriko Kanematsu
Chiba University School of Nursing

本研究の目的は、小児糖尿病患者がもちいている情緒志向型の対処行動がどのようなものかを調べることである。10～19歳の小児糖尿病患者13名が、ストレスがあるときに気晴らしになったり気が休まるものを写した36枚の写真を分析した。その結果、「好きなことに熱中してストレスを発散させる」「ソーシャルサポートを求める」「ペットと過ごす」「景色を眺める」内容が得られた。ストレスが高いときに最も役立った対処行動は、患児がいつも行っている身近なものであり、患児がいつも行っている情緒志向型の対処行動を支援していくことが大切であると考えられた。

KEY WORDS: emotion-focused coping, adolescent, IDDM, photography

I. はじめに

小児糖尿病患者は、発達上のそして日常生活上のストレスや疾患に関連したストレスに対し、様々な対処行動を行っている。研究者は、これまで10代の小児糖尿病患者の対処行動を質問紙(A-COPE: Adolescent Coping Orientation for Problem Experiences)を用いて数量的に把握する研究を行ってきた。その結果、ストレスに対しより多くの方法で対処している患児や、「自分で積極的に問題に取り組む」対処パターンの多い患児は、療養行動が適切で血糖コントロールが良い傾向がみられた^{1) 2)}。対処行動を、問題志向型の対処行動と情緒志向型の対処行動に大別して考えると、「自分で積極的に問題に取り組む」対処パターンは問題志向型の対処行動として位置づけられる。しかし、血糖コントロールには残存インスリン分泌などの生理的因子も大きく影響し、患児の努力では解決できない問題も多いことから、情緒志向型の対処行動も大切である。「気晴らしとリラックス」はストレスの対処行動として重要であるだけでなく、ストレスをためないためにも重要であるといわれている。しかし、小児糖尿病患者は健康児に比べ有意に「気晴らしとリラックス」が少なかった¹⁾。そこで、小児糖尿病患者がもちいている「気晴らしとリラックス」などの情緒志向型の対処行動がどのようなものかを知ることを目

的に、本研究を行った。

研究方法には患児が撮影してきた写真を用いた。写真や絵画などの視覚表現(Visual Representation)を用いた研究方法は、子どもや青年の気持ちや考えを理解する手段として有用であり多くの研究が行われている^{3) 4)}。

II. 研究方法

1) 対象者

小児糖尿病外来を受診中のインスリン注射を行っている10代の小児糖尿病患者で、調査の承諾が得られた22名にインスタントカメラを渡した。そのうち写真を持ってきた13名(59.1%)を対象とした(表1)。写真を持ってこなかった患児は、上手く写らなかったと答えたものが多かった。対象者の背景は、男子6名、女子7名であり、平均年齢は14.8歳(範囲:10～19歳)、平均罹病期間は5.2年(8ヵ月～14年)であった。また、ヘモグロビンA1cが8.0%未満の血糖コントロール良好な者は5名、8.0%以上9.0%未満が4名、9.0%以上の血糖コントロール不良な者は4名であった。

2) 調査方法

外来診察の待ち時間に、調査の説明を行い承諾の得られた患児に対し、現在のストレスについて尋ねた後、「自分にとって、ストレスがあるとき気晴らしになったり、気が休まるものを何枚でもよいので写してきて下さい。写真の裏に何を写したのか説明を書いて、次回の外来受診日に持ってきてください。」と説明し、インスタ

表1 対象者の背景

ケース	性	年齢	罹病期間	HbA _{1c}	ストレスの内容
A	男子	10歳	8カ月	6.0 %	学校の成績、学校の先生の無理解、血糖検査の結果が気になる
B	男子	11	8カ月	6.1	糖尿病になったこと、血糖検査の結果が気になる
C	男子	11	5年	8.4	紫斑病に罹り入院した、血糖コントロールの悪化、学校での低血糖
D	男子	12	1年	6.0	血糖測定が面倒、中学校への進学、合併症の不安
E	女子	14	4年	11.7	進路の決定、体重増加、血糖コントロール不良、合併症の不安
F	男子	14	6年	10.4	高校受験、血糖コントロール不良、母親の病気
G	女子	15	7年	9.6	体重の増加(半年で10kg)、血糖検査の結果が気になる
H	女子	17	9カ月	8.7	糖尿病になったこと、学校の先生の病気の無理解
I	女子	17	3年	7.9	高卒で就職できずに専門学校に通学、進路の不安
J	男子	17	14年	8.7	大学受験、進路の決定
K	女子	18	9年	8.5	高校生活が辛い、専門学校への受験の失敗、進路未定
L	女子	18	9年	13.7	血糖が不安定、インサリンの持続注入による負担、進路未定、母親の病気
M	女子	19	7年	7.9	仕事の残業が多いこと、血糖コントロールの悪化

表2 写真で表現された対処行動 (下線は、最も役に立った対処行動)

ケース	写してきたもの	写真の裏に書かれたコメントと説明 (「」内は、患児の記載)
A	①CDを聞いている自分 ②自転車に乗っている自分 ③～⑤ラージカートをしている自分	SMAPのCDを聞いているところ。 2km離れた所まで行く。 2週間前から始めた。上手いよ。
B	①ファミコンをしている自分 ②ファミコン	いつもファミコンをしている。
C	①料理をしている母親 ②鉄道模型	「顔」-入院中一番助けになった。日中、付き添ってもらった。 模型を組み立てるのは大変だけど面白い。入院中は葉書で作った。
D	①本 ②本 ③自転車に乗っている自分 ④ファミコンをしている自分 ⑤ペット(犬)	「市の移動図書館から借りた本を読むのが好きです。」 「ファンタジー小説を買って読むのが好きです。」 「自転車で遠く行くのが好きです。」 「ファミコンが好きです。」 「ペットのラッキーです。」
E	①友人と自分	「friend」仲のよい子ができて学校が楽しくなった
F	①テレビ ②ステレオ ③スケートボードをしている自分	「テレビ」 「ステレオ」 「スケボ」
G	①ペットと自分 ②スキー場での自分	犬が一番、言うことをきいてくれるんだよ。 年に1回、家族全員で行く。皆でワイワイしているのがいい。
H	①修学旅行中の友人と自分 ②アイドルのポスター ③アイドルのコンサート会場で友人と自分	「仲良しグルビー in 北海道」 「I LOVE SMAP♡」入院中もよく聞いていた。 「95.2.12. In 横浜アリーナ. SMAPイベント」大声で応援するとすっきりする
I	①川辺の紅葉	「これは、先日紅葉を見に行った時の写真です。本当は海の写真にしたかったんですが写真を撮るのがへたでうまく写りませんでしたので、この写真にしました。海とか河とか水系が好きで、見ていると1時間でも2時間でもボーッとみている。心が落ちつくというか、なんというか、まあ、そんなところですよ。」
J	①CDラジカセット、ロックのCD ②本箱 ③④競馬場 ⑤ファミコン	ロックを聞く。聞くだけじゃなくて、歌うことも多い。あばれながら歌うから「うるさい」っていわれるけど、すっきりする。 -進学で悩んだ時、一番助けになった 本は好きで何時も読んでる。 父親の影響。雑誌で調べてから競馬場へ行く。馬はきれいですよ。
K	①アイドルのCD ②DMキャンプの友人達と自分 ③自分で描いた「おぼろの青春」 ④アイドルのポスター	大好きなアイドル。いつも聞いている。 自分から電話して学園祭を案内してもらった。 学校が嫌だからマンガばかり描いていた。 「カー君」
L	①②相田みつをの本 「おかげさん」にんげんだもの ③友人達と自分	養護学校の先生に勧められた本。落ち込んでいるときによくみる。 良く相談する友達。一緒にカラオケに行くのが一番の発散のり封。
M	①プロ野球のファン感謝デーの帰り道の自分	野球を見にいくと髪がサラサラになる。 友達と一緒に行く。

ントカメラを渡した。

患児が持ってきた写真をみながら、何を写してきたのか、自分にとって一番役に立つものはどれかなどについて話し合った。

III. 結 果

13名の患児は、全員がさまざまなストレスを感じていた(表1)。患児は、一人当たり1~5枚、合計36枚の写真を書き写してきた(表2)。写真の裏に書かれたコメントは15(表中「」付)であった。写真をみながら、患児に説明を加えてもらい、写真に写された対処行動の内容を検討した。

その結果、①音楽を聞いたり歌ったりする(5枚、ケースA, F, H, J, K), ②ファミコンやテレビに熱中する(5枚、ケースB, D, F, J), ③アイドルに熱中したり、コンサートやファン感謝デーに行き応援する(4枚、ケースH, J, K, M), ④自転車、ローラースケート、スケートボードなどで体を動かす(6枚、ケースA, D, F), ⑤本を読む(5枚、ケースD, J, L), ⑥鉄道模型を作ったり、マンガを描くなど趣味に熱中する(2枚、ケースC, K), ⑦仲のよい友人と過ごす(4枚、ケースE, H, K, L), ⑧家族と過ごす(2枚、ケースC, G), ⑨ペットと過ごす(2枚、ケースD, G), ⑩景色を眺める(1枚、ケースI)に分類された。①~⑥は「好きなことに熱中してストレスを分散させる」対処行動であり、⑦⑧は「ソーシャルサポートを求める」対処行動であった。また、⑨は「ペットと過ごす」、⑩は「景色を眺める」ことで情緒を安定させる対処行動であった。これらの結果を性別にみると、男子は、全員が「好きなことに熱中してストレスを分散させる」対処行動を書き写していた。また、女子は7名中、5名が「ソーシャルサポートを求める」対処行動を書き写しており、③に含まれるファン感謝デーに行き応援する内容を写したケースMも、親しい友人と一緒にいくと述べており、自分を理解してくれるひとといることが情緒志向型の対処行動に挙げられていた。ストレスが高いときに最も役立つ対処行動を尋ねたところ、患児たちは表2の下線に示した対処行動を答えたが、ケースD, Fの2人は、特にどれということはないと答えた。ストレスが高いときに最も役に立った対処行動には、好きなCDを聞いたり歌ったこと(ケースA, H, J), ファミコンに熱中したこと(ケースB), マンガを描き続けたこと(ケースK), 友達とカラオケに行ったこと(ケースL)など、いつも行っている対処行動を半数の患児が答えた。また、母親が付き添ってくれたこと(ケースC)や、仲のよい友達といたこと(ケースE), ペットと過ごしたこと(ケースG)

など身近なひとや動物と過ごすことも挙げられていた。

IV. 考 察

患児の書き写してきた写真をもとに、情緒志向型の対処行動について患児の話しを聞いた結果、患児はいつもより多弁に、また、楽しそうに様々な話しをした。今回の対象者のなかには、糖尿病の発病や進路の問題などストレスが高い患児が多く、写真を写し研究者と話し合ったことが患児の気持ちの表出につながったと考えられた。

写真の内容は、「好きなことに熱中してストレスを分散させる」「ソーシャルサポートを求める」「ペットと過ごす」「景色を眺める」に分類された。このうち、「好きなことに熱中してストレスを分散させる」はA-COPEの「気晴らしとリラクセス」の項目に含まれるものが多く、「ソーシャルサポートを求める」はA-COPEの「友達をサポートを求める」「家族の力を求める」の項目に含まれていたが、「ペットと過ごす」「景色を眺める」についてはA-COPEの項目にはない内容であった。「好きなことに熱中してストレスを分散させる」内容が男子に多く、「ソーシャルサポートを求める」内容が女子に多かったことは、A-COPEを用いた健康児⁵⁾と小児糖尿病患者²⁾の結果と同様であった。

ストレスが高いときに最も役立つ対処行動を尋ねたところ、患児がいつも行っている身近なものがストレスが高いときにも有効であることが示されていた。従って、問題志向型の対処行動に加えて、患児がいつでも身近に用いることのできる情緒志向型の対処行動を有していることが大切であると考えられた。

引用文献

- 1) Nakamura, N., Kanematsu, Y.: Coping in relation to self-care behaviors and control blood glucose levels in Japanese teenagers with insulin-dependent diabetes mellitus, *Journal of Pediatric Nursing*, 9(6): 427-432, 1994.
- 2) 中村伸枝: 10代の小児糖尿病患者の対処行動と療養行動、血糖コントロールに関する縦断的研究, 千葉看護学会誌, 2(1): 23-29, 1996.
- 3) Hanna, K. M., Jacobs, P. M., Guthrie, D.: Exploring the concept of health among adolescents with diabetes using photography, *Journal of Pediatric Nursing*, 10(5): 321-327, 1995.
- 4) Rollins, J.: Childhood cancer: Siblings draw and tell, *Pediatric Nursing*, 16: 21-27, 1990.
- 5) 中村伸枝, 兼松百合子: 10代の子どものストレスと対処行動, 小児保健研究, 55(3): 442-449, 1996.